**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第５８回　（２０１９年１２月１０日）**

**・第５８回の勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」３４頁**

**📖読み**

**『福音』３４頁上段L１３～１６**

***彼らは******心を、視覚、聴覚、触覚の対象およびその他の世俗的な性質のものからは遠ざけていた。このようにしてはじめて、彼らはブラフマンを彼ら自身の内なる意識として、悟ったのです。***

参加者：前回、ブラフマンの知識（ブラフマギャーナ）を得るためのリシたちの修業について話がありました。世俗的なものから離れる、そして知識の感覚器官、行動の感覚器官をコントロールする。コントロールをする理由として、

①霊的実践のために力をセーブしておくため。

②コントロールしないと心が落ち着かなくなるから。

③コントロールしないと、体意識が増えるから。

という3つの説明がありました。

その中でも、体意識を増やさないことは一番大事なことだ、ということでした。

（解説）

体意識を減らす、ということはとても大事なことです。なぜなら、ブラフマギャーナは純粋な意識ですが、それは体意識とは正反対なものだからです。

すべてのギャーナ・ヨーギーの実践の目的は、体意識をなくすことです。体意識がなくなると純粋な意識があらわれます。実践の目的、最終目標が明確でないと、実践のやる気がなくなるし、実践をやる意味すらありません。

まず、最初から自分は何の目的でヨーガの実践をしているのかを明確に理解してください。　バガヴァッド・ギーターにはギャーナ・ヨーガ、カルマ・ヨーガなど、さまざまなヨーガのことが書かれています。１８章すべてがそれぞれのヨーガについてです。その中で例えば、ギャーナ・ヨーガについて、悟りの方法は何か、ギャーナ・ヨーガの目的は何か。方法と目的を最初から明確にしておかないと、あとで混乱や矛盾も出ます。そうなるとやる気がなくなり、進まないのです。

ギャーナ・ヨーガの一番の目的は、体意識をどのように減らして、純粋な意識をどのように増やすかです。そのことをはっきりと理解する必要がある、ということです。

参加者：前回は次に、ブラフマギャーナを得るためのもう一つの理由として瞑想があげられました。

（解説）

**自分の本性を理解したうえで、私はブラフマンだという結論を得る**

今の我々の状態では、ブラフマンについて具体的にイメージすることは難しいです。しかし自分の中には、内なる自己は絶対にあります。もしそれがないと、自分は存在できないことになる。我々の存在の基礎は意識なので、ブラフマンを瞑想するよりも、純粋な意識について集中して考える方が、分かりやすいです。

そして最終的に純粋な意識とブラフマンとの関係を考える、そうすると、

スヴァーハム　アハン　ブラフマースミ（svāhām ahaṁ brahmāsmi）：私はブラフマンです

という結論が出ます。

シュリー・ラーマクリシュナは、のちに直弟子となるほどの深い関係をもつ若者たちにはこのような深い話をしました。あなたたちはまず「私は誰か」を理解して、そして私との関係を理解してください、と。

もしも最初の問いに、「私は体」と理解したらシュリー・ラーマクリシュナとの関係もそのように誤って理解しますが、まだ体意識の強いうちに「私はブラフマン」と理解しても、矛盾が生じ、師弟関係を結ぶうえでの障害となる可能性があります。だからシュリー・ラーマクリシュナは最初に「自分の本性、アートマン、サッチダーナンダ（純粋な意識・存在・至福）を理解してください」と言い、そのうえで自分の内なる本性と師（シュリー・ラーマクリシュナ）の内なる本性は同じだと理解してください、そして瞑想を続ければ、最終的には「スヴァーハム　アハン　ブラフマースミ」（私はブラフマンです）「サ　アハム、アハム　サ」（それは私、私はそれ）という結論を得る、と言ったのです。これは『シュリー・ラーマクリシュナの福音』の中にあります。

ギャーナ・ヨーガの実践は、

・抑制

・識別

・真理について集中して瞑想する

ことです。

その実践をし続けるために、リシたちは感覚の対象からできるだけ離れた、とシュリー・ラーマクリシュナは言っています。ここでは、リシたちが行ったギャーナ・ヨーガの実践方法について説明していますが、そのことと現代に生きる我々がそのような実践をできるかどうか、というのはまた別の話です。

実践がかなり進むと、感覚の対象があっても、感覚が感覚の対象に向かないようになります。

例えば、シュリー・チャイタンニャ・デーヴァ（ガウラーンガ）はとても若いときに放棄をして出家（僧）になりたいと思い、故郷を出てイーシュワラ・プーリと言うお坊さんに「出家僧になりたいので、そのための準備をしてください」とお願いしました。するとイーシュワラ・プーリは「あなたはとても若く美しいし、奥さんがいます。本当にサンニャーシンになりたいのですか？　サンニャーシンになるには準備が必要ですが、あなたは本当にその準備ができているのですか？」と聞きました。シュリー・チャイタンニャは「私がその準備ができているかどうかのテストをしてください」と言いました。そこで、イーシュワラ・プーリは、シュリー・チャイタンニャの舌の上に砂糖を置きました。しかしその砂糖は唾液でぬれることなく、風で飛び去りました。

イーシュワラ・プーリは、シュリー・チャイタンニャがどれくらい感覚のコントロールができているかをテストしたのです。シュリー・チャイタンニャは完全に味覚のコントロールができていたので、砂糖が舌の上に置かれても、感覚がその対象に向かなかった、つまり感覚をそれくらいコントロールできていたのです。誤解しないでください、このことは、シュリー・チャイタンニャが砂糖を普段まったく食べない、ということを言っているのではありません。もし砂糖を食べる必要があれば、シュリー・チャイタンニャは砂糖を食べました。

シュリー・チャイタンニャのこの出来事は、彼が悟る前のことです。悟る前にそこまで感覚のコントロールができていたとは、信じられないほどすごいコントロールです。それはまるで、亀が危険を察すると、両手足を甲羅の中に完全に引っ込めるようなものですね。

リシたちは、ギャーナ・ヨーガの実践のために、すべての感覚の対象から離れて、「私は純粋な意識である」と瞑想していました。本当は、快楽の対象が目の前にあっても、それから何も影響を受けないようになるまでは、快楽の対象からは離れたほうがいいのです。

**📖読み**

**『福音』３４頁上段L１７～下段L２**

*しかしカリユガでは、人は生きるために大きく食物に依存しているから、自分は肉体であるという思いを完全にふり棄てることはできません。心のこの状態の中で『私は彼である』と言うことは彼にとってふさわしくありません。人は、あらゆる種類の世間的なことをしているときに、『私はブラフマンである』と言ってはならないのです。世俗への事物への執着を棄てることのできない者たちや、『私』という感じをふり落す方法を知らない者たちはむしろ、『私は神の召使である、私は彼の信者である』という考えを持つべきです。人は信仰の道を通ってでも、神を悟ることはできるのです。*

（解説）

これまで古代のリシたちの実践方法の説明をしてきましたが、シュリー・ラーマクリシュナはここで、現代はそのやり方は無理だ、と言っています。なぜなら、昔の人は体がもっと強かった。だから体の状態も心の状態もリシたちと同じようにはできないし、森がなくなるなど、昔のような環境でもないからです。

**体意識がある間は、純粋な意識が理解できない**

現代の我々は、生きるために食物に多く依存しています。

もし一日でも食べなければ、とても弱ります。時々断食をすることはあっても、それを続けることはほとんどできません。生きるために、食べ物はもちろん、飲み物、服、建物、エアコン、など様々なものが必要で、それらがないと生きることが難しい。そして、体意識はなくならない。

昔は、快楽の対象もそれほどありませんでした。今は、快楽のモノだらけですね。今は、家の外だけでなく家の中にも快楽の対象がたくさんあるので、体意識をなくすことは本当に難しいことです。

「私は純粋な意識である」と口で言っても、体意識がある間は、純粋な意識とはどんなものかが理解できず、イメージすら持てません。何度も「私は純粋な意識」「私は体ではない、アートマンです」ということを勉強し聞いても、本当は理解ができていない。

「私は純粋な意識である」ということを本当に理解しているかどうかの印があります。

「私は純粋な意識である」ことを理解していると、恐れ、心配はなくなります。我々には体意識がある。例えば、病気で「しんどい」と感じるとき、絶対に体意識があります。そして体意識があるときに「私はブラフマンである」と言うと、矛盾が出る。なぜなら体意識がある間は、「私はブラフマンである」ことは理解できないからです。

シュリー・ラーマクリシュナは、ギャーナ・ヨーガとは何かを、リシの例を使って伝えました。しかし食べ物への依存度が高い現代では体意識をなくすことが難しいので、ギャーナ・ヨーガの実践も大変難しい。現代はリシたちの真似はできない。ギャーナ・ヨーガは良いし早く悟ることができるが現代での実践はとても難しい。

難しい理由の一つは、現代の我々には放棄は難しいことです。例えば家族がいると家族から離れることもできません。

もう一つの理由は、どれだけ「私は体ではない、純粋な心である」ということを実践してもそのことを深く理解できず、なかなか結果が出ないことです。

そしてその道（ギャーナ・ヨーガ）は自分の道ではないということを理解してください。

では、悟りたい、神様が好き、純粋になりたい、永遠の幸せが欲しい、解脱が欲しい、という人にとって、ギャーナ・ヨーガが自分の道ではないのなら、それ以外の方法は何でしょうか？

**信仰の道**

**現代は信仰の道で神を悟るべき**

シュリー・ラーマクリシュナは、体意識をなくすことができない現代の我々のために、別の悟りの方法を示しています。

それは、「私は神様の召使、私は神様の信者」という考えを持つことです。その他にも、「私は神様の子供（息子、娘）」、「私は神様の一部分」というアイデアもあります。

これらは神様と自分の関係です。

そのような関係を持つことによって、神様に対する愛が育ち、最終的に悟ることができるのです。これが信仰の道、バクティ・ヨーガの道です。信仰の道を通っても神を悟ることはできます。

バクティ・ヨーガの道で、自分にとって神様はどういう存在かということに関して、5つの種類の関係があります。

　①神様を創造主、お父さん、お母さんとみる（シャーンタ）

②神様を子供とみる（ヴァーツァリャ）

　③神様を友達とみる（サッキャ）

　④神様を恋人、旦那さん、奥さんとみる（マドゥラ）

　⑤神様は主人、私は召使とみる（ダーシャ）

これらの関係の中でシュリー・ラーマクリシュナは、一番自然な関係は、「神様は私のお父さん」という関係だと言っています。キリスト教では父なる神、天にましますわれらの父、という考えですね。インドでは、タントラ。神様は私のお母さんという考えが多く、マザー・カーリー、マザー・ドゥルガーなど、たくさん女神様がいます。

**神様を思い続けると神様がすべてになる**

このように、神様と自分の関係を人間関係に重ね合わせて実践し、いつも神様のことを思う、それがバクティの道です。神様のことを思い続ける事で私意識がなくなり、神様意識が出る。神様のことを考えれば考えるほど、自分の考えは減り続け、最終的には神様だけになります。そして悟ることができるのです。

例えば、ラーダーはどこにでもクリシュナを見て、最終的には自分自身がクリシュナだ、という考えが出て、ラーダーの存在がなくなります。自分は女性、ある人の奥さん、などの考えが全てなくなり、ただクリシュナの存在だけがあるのです。

ラーダーの私意識がなくなりクリシュナ意識が出ることやシュリー・ラーマクリシュナの信者にラーマクリシュナ意識が出る、ということと、ギャーナ・ヨーガの実践で私意識がなくなりブラフマン意識が出る、ということの最終的な結果は同じす。バクティ・ヨーガの道とギャーナ・ヨーガの道は、目的も最終的な結果も同じで、どちらも心が清らかになり、解脱もできます。

バクティ・ヨーガとギャーナ・ヨーガの違いは、ギャーニはブラフマンと一つになりたいが、バクタは神様と一つになるのではなく、神様を味わいたい、ということです。バクタも神様と一つになりたいという目的を持ち最終的に神様と一つになることもできますが、バクタはそのことを望んでいません。バクタは砂糖になりたいのではなく、砂糖を味わう人のように、神様を味わいたい。

歌があります。

チニホテチャイナマゴ　：私は砂糖になりたくない、砂糖を味わいたいのです。

チニホテ、チニ（砂糖）ホテ（なる）、チャイナ（欲しくない）、

チニケテ、ケテ（味わう）　バロバシ（好きです）

バガヴァッド・ギーターのなかで、カルマ・ヨーガとギャーナ・ヨーガは別のものではない、と書かれていますが、バクティ・ヨーガもみんな同じ場所にたどり着きます。

プラヴァダンティ　ナパンディターハは、「同じ場所」という意味です。

第5章4節、5節

***サーンキャとヨーガを愚者は異なるものと考えるが、そのどちらか一方の道を究めた人は、両方の成果を得るであろう。***

***サーンキャを通じて到る境地にはヨーガによっても達するし、この二つを不異（同じ）と見る人は、事物の実相をよく理解した賢者である****。*

参加者：どちらか一つのゴールに達した人は、両方のゴールに達する、と書いてあります。

そうです。同じ場所にたどり着くのです。

しかし本当に悟った人は、「別々」とは言いません。なぜなら悟るための目的、方法は別々ですが、体意識がなくなる、という結果は同じですから。

純粋な意識も、ブラフマンも、神様の意識も、本性は同じサッチダーナンダです。

シュリー・ラーマクリシュナは、バクティの道、つまり「私は神様の息子」という感じで実践をするほうがいい、と言っています。なぜなら我々は仕事から離れることができない。そして仕事をするとき体を使わなければならず、体を使うと絶対に体意識が出ます。

**📖読み**

**『福音』３４頁下段L３～１５**

*ギャーニは、『これではない、これではない』と識別して、自分をこの世界のものと見る考えを棄てます。そのようにしてはじめて、彼はブラフマンを悟ることができるのです。それはちょうど、一段一段と階段を背後に踏み捨てて、ついに家の屋根に到達するようなものです。しかしもっと身近にブラフマンを知っているヴィッギャーニは、それ以上のことを悟ります。彼は、階段も屋根と同じ材料、つまりレンガと石灰とレンガ粉とでできている、ということを悟るのです。『これではない、これではない』という除去の方法によって直観的にブラフマンとして悟られるものが、宇宙およびそこに生きるすべての生き物たちになっているのだ、ということを、その時に知るのです。ヴィッギャーニは、ニルグナすなわち属性のない実在が同時にサグナすなわち属性を持つ実在であることを見るのです。*

（解説）

通常、ヴィッギャーニは「科学者」と訳されます。しかしここでは前後関係で、ヴィッギャーニとは、「特別なギャーニ」を意味します。

ギャーニのふつうの知識のやり方は、「ネーティ、ネーティ、（これではない、これではない）」と識別し、私たちが見ているもの、聞いているものなど、認識しているものすべてを非実在だ、と識別します。

しかし、実際に触れることができたり、聞くことができるものが、本当はない、つまり非実在だ、というのはおかしくはないですか？

今、ここの水があるから飲みますが、なぜこの水が非実在なのでしょうか？

水がここにあるのに実在ではない、という。なぜでしょうか？

参加者：永遠なものではないから。

そうです。

永遠に存在しているように思えるヒマラヤや太陽ですら、何億年という年月を考えると、始まりもあり終わりもあります。

宇宙にも始まりもあり終わりもあります。もちろん体も心も一時的ですから非実在です。

我々が認識できるすべての存在には、始まりがあり、存続し、そしてなくなります。

一つ一つ「ネーティ、ネーティ」と識別すれば、その結論が出ます。

実在は、過去、現在、未来にずっと続くものです。それは、アートマン、純粋な意識です。

そして、実在ではないものから離れる、やめる、と、実在があらわれます。

ネーティ、ネーティ、という識別を繰り返し、非実在から離れる、やめる、を続けていくと、最終的には実在だけが残ります。それが純粋な意識です。

「これではない、これではない」というように、階段を一段ずつ背後に踏み捨てていくと、屋根、つまりブラフマンにたどり着く。そして自分は屋根になる。

ギャーニにとってはそれで十分です。もはや階段のことは関係ありません。

**ヴィッギャーニ**

**ヴィッギャーニはまず放棄をして、その後ですべてはブラフマンだとみる**

しかし、ヴィッギャーニの理解は違います。

ヴィッギャーニは、屋根も階段も同じ材料でできている、と理解します。

ヴィッギャーニも始めは「ネーティ、ネーティ（これではない、これではない）」と識別しますが、最終的には、「イーティ、イーティ（これ、これ）」すべてはイーティだといいます。なぜならブラフマン以外の存在は、何もないからです。

ブラフマンは遍在で、すべてのものの中に入っています。すべてはブラフマンです。

もし、ブラフマン以外のものの存在を認めると、二元論的になります。例えばキリスト教では、サタンと神様の二つの存在がありますが、ヒンドゥ教はそうではありません。ブラフマンだけが実在です。マーヤーをブラフマンとは別の存在のように言っていますが、マーヤーはブラフマンから出ています。ブラフマンとマーヤーの関係は、クモとクモの巣の関係のようす。ブラフマンがクモでマーヤーがクモの巣です。

ヴィッギャーニは、これまでには自分が放棄したものもすべてがブラフマンである、ただ、あらわれ方が違うのだ、ということを理解します。ブラフマンからあらわれたものは、一時的でブラフマンとは別の存在のようですが、その基礎はブラフマンです。すべてがブラフマンですから。

例えば人間もブラフマンのあらわれの一つですが一時的です。我々は、本当はブラフマンだけれど、永遠ではない。すべてはブラフマンでも、そのあらわれは一時的です。

ブラフマンは自分は永遠だが、そのあらわれは一時的なのです。一時的ではあるけれど、それもブラフマンですね。

例えば、Aさんが会社に行くとサラリーマン、店に行くとお客様、病院に行くと患者さんと呼ばれますが、うちに帰るとずっと同じAさんです。Aさんにとって、サラリーマンやお客様であることは、一時的です。ブラフマンとブラフマンのあらわれの関係もそうです。

また例えば、金が、金細工師によって加工されるとネックレスになります。しかし、再び溶かされると金になります。金のあらわれであるネックレスは名前と形があり、一時的です。

シュリー・ラーマクリシュナの直弟子である、トゥリヤーナンダジはいつも「アサット、アサット（非実在、非実在）」と言っていましたが、亡くなる直前には、「ブラフマン　サット（実在）、宇宙もサット（実在）」といいました。ブラフマン以外何もないからです。ただ、そのあらわれが一時的、それがヴィッギャーニの理解です。

シュリー・ラーマクリシュナはご自分がヴィッギャーニでした。

参加者：ギャーニはネーティ、ネーティといいながら、放棄していくのですね。では、ヴィッギャーニは？

ヴィッギャーニは、最初は放棄をして、あとですべてがブラフマンだと理解します。すべての中にブラフマンを見る。すべての中にシヴァ神、神様を見る。

参加者：じゃあ、ギャーニよりもヴィッギャーニのほうが、段階がちょっと上ですか？

上だ、ということは難しいです。しかし、ヴィッギャーニの方が、理解が深く包括的です。

参加者：ギャーニが成長してヴィッギャーニになるのですか？

それはケースバイケースです。ある人はギャーニで終わりです。それでもブラフマンを悟りますから。

ギャーニは他の人と関係がなくなる可能性がありますが、ヴィッギャーニはもう少し包括的なので、人間関係がなくなる、ということはありません。

**ヴィッギャーニは、すべては一時的でブラフマンだけが永遠ということを片時も忘れない**

しかし、ヴィッギャーニが悟った後、それまでの見え方とは全く変化し、何を見ても「これは一時的である」ということを一秒も忘れません。「すべてはブラフマン、神様のあらわれだけれど、そのあらわれは一時的だ」ということを決して忘れません。それがヴィッギャーニです。それに対して我々は、すぐにそのことを忘れるので執着が出るのです。

ブラフマンとカーリー女神も、ブラフマンとそのあらわれ、という関係です。カーリー女神はプラクリティ、サットワ、ラジャス、タマスのあらわれで、そこから宇宙も作られています。サットワ、ラジャス、タマス、もしくは５つの要素から宇宙は作られています。５つの要素もグナから出ているからです。5つの要素の一つ一つには、グナがあります。それで５つの要素もプラクリティから出ています。そして、プラクリティはブラフマンから出ている。しかし、ブラフマンは永遠でプラクリティは一時的、という違いがあります。

ヴィッギャーニは、同じものでも、あるときは性質があり、ある時は性質がない、ということを理解しています。

『福音』の中に、ある時は赤い色、また別のときは青い色のカメレオンの話がありますね。そしてカメレオンが住む木の下にいつもいる人はカメレオンについて、「ある時はある色、またある時は色がない」と言いました。それは、「ある時は性質があり、またある時は性質がない」ということです。ニラーカラ、ニルグナ、形も色も性質もなし。

ピュアブラフマン、それがシュッダ（＝ピュア）ブラフマンンです。

シュッダブラフマパラプパララン♫　（ラームナームの時の賛歌を歌われる）

この歌では、ラーマ神はシュッダブラフマンの一時的なあらわれだ、と歌っています。アヴァターラ（神様の化身）もシュッダブラフマンの一時的なあらわれなのです。

クリシュナもそうです。ある時、あらわれた。それはもちろん特別なあらわれです。

そしてヴィッギャーニは、アヴァターラとブラフマンが同じ存在である、ということを理解しています。

*一つ、話をききなさい。あるとき、ある男が森に入って、木の上に一匹の小さな動物を見た。彼は帰ってきた友人に、自分はある木の上に美しい赤い、色の動物を見た、と告げた。第二の男は答えた、『私も森に行ったときにその動物を見た。だが、君はなぜあれを赤いなどと言うのか。あれは緑色だよ』と。居合わせたもう一人の男はこの両方に反対し、それは黄色だったと言い張った。間もなく他の連中がやってきて、それは灰色だった、すみれ色だった、いや青だったなどと主張した。ついに彼らは争いをはじめた。論争を落ち着かせるために、彼らはみなで木の下に行った。木の下に一人の男がすわっていた。たずねられて彼はこう答えた、『はい、私はこの木の下に住んでいて、その動物をよく知っています。みなさんの言われるのは全部本当です。それはときには赤く、ときには黄色く、またときには青やすみれ色や灰色などさまざまな色に見えるのです。それはカメレオンです。またときどきそれは無色になります。ときには何かの色を持ち、ときには色がなくなるのです』*

*同様に、つねに神のことを思っている人は、彼の真の性質を知ることができる。彼はまた、神は求道者たちにさまざまの形でご自分をお示しめしになることも知っている。神は属性をお持ちだ。同時に、彼はそれをまったくお持ちにならない。木の下に住んでいる男だけが、カメレオンはさまざまの色になることを知っており、また彼はさらにこの動物はときにはまったく無色になる、ということも知っている。無益な議論に苦しむのは他の連中である。*

*（『福音』８７頁）*

（解説）

この例のように、『福音』はとても深い哲学を簡単な例を使って説明しているので、みなさん、もっと注意深く読んで、その内容を深く理解してください。

カメレオンはある時、色がないだけでなく、形も性質もありません。色、形、性質があるカメレオンと色、形、性質がないカメレオンは同じ存在ですね。それと同じように、ブラフマンとカーリー女神は同じ存在です。カーリー女神はブラフマンの一時的なあらわれです。

カーリーという言葉はカーラ（時間）からきています。つまり、時間と空間で限定されたブラフマンがカーリー、プラクリティなのです。

**📖読み**

**『福音』３４頁下段L１６～２１**

*人は長いこと屋根の上に住めません。彼はまた下におりてきます。サマーディの中でブラフマンを悟る人びとも、やはり下りてきて、宇宙とそこに住むすべての生きものになっているのはブラフマンであるのを知るのです。音階には**サ、レ、マ、ガ、パ、ダ、ニという調子があるが、人は長いこと『二』の声を出しつづけることはできません。*

（解説）

サ、レ、マ、ガ、パ、ダ、ニは、インドのドレミファソラシです。その一番高い音を出し続けるのは難しい。

インドでは伝統的に、屋根に上がっていろいろなことをします。例えば夏は夕方に屋根に上がると涼しい風が吹き、冬は強い日差しを受けることができます。花や野菜を屋上で作ることもあります。だからさまざまな理由で屋根に上っても、また自分の部屋に戻る。一番高い音も屋根も、サマーディを意味しています。

ヴィッギャーニは、サマーディに入った後も、神様の恩寵で元に戻ります。ギャーニはサマーディに入ったら、もう元には戻らない、体はなくなりますが、今はその話ではありません。戻ってくる目的は、神様や神様の化身の目的を満足させるためです。スワーミージーがそうでした。タクールも皆さんに教えるために戻りました。そしてサマーディから戻った後に、すべてがブラフマンの一時的なあらわれであることを見る。サマーディに入っているときのブラフマンは永遠の存在です。

参加者：ヴィッギャーニはサマーディに入っても、全員戻ってくるんですか？

そうです。まず、ギャーニになって悟ります。そして戻ったらヴィッギャーニです。突然ヴィッギャーニにはなれません。

我々は、体と自分を同一しないと生きられないので、ヴィッギャーニもブラフマギャーナを得た人も、サマーディから戻るとまた体意識が出ます。なぜならもし体意識が１００％なくなると、食べる、寝る、話すなどのことができなくなりますから。

しかしヴィッギャーニにとって、体意識は影のようです。一秒も自分が純粋な意識であるということを忘れず、他の人と接するときもみんながブラフマンだと見ています。しかしみんな影のようなのです。その人はもはや、執着を持つことも、怒ることも、うぬぼれることもできません。そしてサマーディから戻ると、たとえ同じ武器でも鉄の剣が人を殺すことができない金の剣にかわるように、私意識が少し残っていても、それはふつうの私意識とは全く違う私意識になります。その時、すべてはブラフマン、ただあらわれが一時的だ、という考えが出て一秒も忘れない。もし、すべてがブラフマンであることを忘れると、また執着が出ますが、ブラフマギャーナは一秒もそのことを忘れないので、執着が出ないのです。

**Q　 &　Ａ**

参加者：ヴィッギャーニのアイデアは、聖典にもあったのですか？

あまりないです。聖典ではギャーニについて言っています。ウパニシャッドもそうです。ヴィッギャーニはたぶん、タクールの特別なアイデアです。

参加者：うちに帰ってからじっくりとヴィッギャーニについて考えてみようと思います。

そうですね。自分で復習することは大事なことです。そうしないと理解することは難しいので、理解するために深く考えてください。

タクールの屋根の歌、サ、レ、マ、ガ、パ、ダ、ニ、の一番高いニの音は長くは続けることができないということを思い出してください。もり二の音から戻った時に私意識が全然ないと、教えることもなにもできなくなる。だからシャンカラーチャーリヤも戻ってくると、少し私意識を持ちましたね。

そしてヴィッディヤー・マーヤーだけが残っています。アヴィディヤー・マーヤーはありません。サットワ的な性質だけがあり、ラジャス、タマスはほとんどありませんが、体を保持するために少しあります。例えば寝ることはタマスの性質です。寝ないと体を保持できないので、タマスが必要です。

Ｍさんはある時、ドッキネッショルでシュリー・ラーマクリシュナが寝ているのを見ていました。シュリー・ラーマクリシュナのような存在でも寝る必要があります。金１００％で金の飾りはできないので合金を混ぜて作るように、少しの体意識や、少しのタマスがないと体を保持できない。心に関していうと、ラジャスがないと他の教えることができない。悟った人のグナの割合は、サットワが99.9％くらいです。

参加者：シュリー・ラーマクリシュナがアヴァターとしてあらわれたとき、サーラダー・デーヴィー、ホーリー・マザーと一緒にあらわれたことには意味があるんですか？　クリシュナもイエスも仏陀もひとりであらわれたのですが？

シュリー・ラーマクリシュナとホーリー・マザーは、同じものの二つの姿、同じ存在なのです。

（20191210『福音』勉強会）以上